

分相応に風が吹く

上 月 明

松崎龍二は、『分相応に風が吹く』という言葉が好きだった。こ  
とわざ辞典には、「人には人それぞれの身分や能力にふさわしい生  
き方、暮らし方がある」という意味が書かれている。

六十二歳、人生も老年期に入ってきた。残りの人生を、どう生き  
ていくかを考えてしまふ。身分相応の遊びにお金を使い、納得でき  
る生き方をするというのが、残り人生の目標である。

龍二が特別養護老人ホームで働き出したのは十年前からである。  
以前は、施設長が勤務医だった民間病院で医事課長をしていた。施  
設長から事務長として特別養護老人ホームの運営を、手伝ってほし  
いと誘われ、転職したのである。

毎朝八時に自宅を出て、車で勤務先に向かう。職場の勤務時間は  
午前九時から午後六時までだが、八時半には職場に着いた。

昨夜から泊まりをしている当直管理人しかいない事務所に入る。  
自席に着きパソコンのスイッチを入れると、画面に木曜日と今日の  
曜日が浮かびあがった。引き出しの施錠を解き仕事の準備をする。  
まだ始業時間まで間がある。

龍二はゆっくり立ち上がり、入所者たちがいる二階のダイニング  
に行った。入所者たちは、車椅子に乗って個室から出て、朝の食事  
を済ませていた。入所者たちに声をかけ挨拶をし、元気がどうか、  
体調が悪そうな者がいないか様子を窺うのが、毎日の日課である。  
車椅子に乗った竹中留子の顔が、内出血なのか赤黒くむくんでい  
るのが気になった。痣のようにも見える。

「竹中さん、その顔どうされましたか」

「……」

顔を振るだけで何も応えない。竹中留子は何があっても一言も喋

らない。いつものことだった。

ガラス張りで、デイルームが室内から見渡せる介護員室に入っていく。介護職員が日誌の記帳や、食後の投薬の準備をしていた。

「昨夜の夜勤は誰かな」

柔らかく、ゆっくりとした声に、作業をしていた職員たちが一斉に振り向く。龍二は職員への言葉のかけ方に、いつも高圧的にならないよう注意を払っていた。

「僕です」

その場にいた職員の中で、一番年長の村津が返事をした。

「竹中さんの顔が赤黒くなっている。どうしたんだ。何か知っていないか」

「はあ、それが深夜にベッドの落下防止の金具に顔を打ち付けたようなんです。朝方の見回りで、見つけました」

村津は、苦笑を浮かべて応えた。

「そうか、それで家族には電話で赤黒い顔のことを説明したのか」

「朝の引き継ぎが終わってから、電話をしようと思っていたところです」

「早いほうがいい。電話をする前に、家族が面会に来たら、驚いて虐待じゃないかと、感情的になられるかもしれない。一刻でも早くしておいた方が、いいんじゃないか」

「わかりました」

村津は弱々しい返事だった。何か納得できない物を秘めているらしかったが、表だって反発してこなかった。

村津は四十歳で、髪を伸ばし、髭は剃らない。入所者に対する態度も横柄なところがあつた。龍二が注意しても、気に入らなければ反抗的に口答えをする。

あまり強く注意をすると、辞めてしまうのではないかと強く言えなかつた。今の介護施設は、どこも介護職の人材不足である。いつもハローワークの求人募集や、新聞に募集広告を入れているが、応募してくるのはまれである。やっと来たパートの応募者は昼間が多

く、勤務シフトが合わなくて組みにくい。フルタイムの応募者にしても、六十歳前後の人間が多く、長期間勤めてくれそうな人材は少ない。

村津は昨年の春に応募してきた。勤めている印刷会社を辞めて、介護職として就職したいと言った。面接したときは髪も整えていたし髭も剃っていた。それに「この施設で経験を積んで介護福祉士の資格を取って、定年まで働きたい」と面接のとき、熱弁をふるったので、正規職員として採用した。

この施設の定年は六十歳であるが、希望すれば嘱託で六五歳まで、勤められるようになっていた。

龍二は施設の規定から、六十歳で退職をしなければならなかったが、施設のオーナーであり、精神科医でもある施設長から、もう五年は事務長として勤務してほしいと頼まれていた。年金支給もあり適度の蓄えもあって、生活に困らなかつたが、仕事を辞めても特別何をしたいというものがない。

何もしなければ、認知症になってしまいたいそうに思えた。ボケ防止の意味で、適度の緊張感が味わえる職場であり、また自由になる小遣い銭稼ぎのために、施設長から辞めろと言われるまで勤めてもいいと思っていた。

「おはようございます」

介護員室に介護課長が出勤してきた。

「井上課長、ちよつと」

龍二はそう言つて、介護員室から連れ出した。井上は、いつも出勤するときデイルームの中を一周してから、介護員室に入ってくることはわかつていた。それが井上のいつもの行動である。二階フロアの片隅に入所者の家族が来たときに、面会ができるよう、応接セットが二セット置かれていた。その一つに腰を落とした。井上もつられるように、対面のソファアに腰を沈めた。

「竹中さんの顔を見たか」

龍二の言葉に、一瞬井上の顔が曇った。

「見ましたが……」

「何を、他人事のように言っているんだ。虐待を受けた後ではないだろうな。と聞いているんだ。村津はベッドの落下防止の金具で顔を打ち付けた後だと言ったが、君はどう思うんだ」

「事務長、竹中さんの顔は、うつ伏せになっていたので、血液が滞留して、赤黒くなったようにも見受けられます」

「わかった。さつき村津に家族に連絡して、痣の原因を説明しろと言ったが、やっぱり竹中さんの家族には、井上課長が電話するんだ。村津にはさせるな。言い方がまずかったら、虐待をされたと騒ぎ立てられ大変なことになる。それでなくても、あそこの家族は文句言いだから、腰を低くして、丁寧に説明するんだ。頼んだよ」

龍二は事務所に戻ると、総務課長の道中が出勤していた。「おはようございます」との挨拶に、軽く手を上げて応えた。

自席の受話器を取り、医務室の番号を押した。出勤の早い医務課長が、電話口に出た。

「すまないが、二階の竹中さんの顔の痣を診てやってくれないか。深夜に顔をベッドの金具に打ち付けたと、夜勤者が言うのだが。その辺りも確認して、また連絡を頼むよ。よろしく」

龍二は受話器を置くと椅子に深く身を沈めた。川崎市の老人ホームでの高齢者連続転落死の事件や、埼玉県や和歌山県、それに名古屋市であった介護施設での、職員による高齢者虐待事件が浮かんだ。職場への不満やストレスを溜めた介護職員の犯行であると、ニュース番組で報道されていた。

記者会見で施設長や事務長が、マスコミや報道機関の記者に手厳しい質問を受け、額の脂汗を拭い、苦しい答弁を繰り返していた。もし自分がそこに座らされたらと考えると、身震いを覚える。

龍二が勤務している施設には、百人の職員が働き、百二十人の高齢者を抱えている。年に一回職員を対象に意識調査を行っていた。介護職員からは、業務が忙しくて余裕がもてない。身体が不調だが休暇が取れない。夜勤が多すぎる。といった職場改善要求の内容が

ほとんどだ。いつ高齢者虐待が起きてても、おかしくない状況だ。

「道中課長、インシデントの綴りを見せてくれないか」

龍二は、先ほど村津の態度から、いやな予感を感じた。

道中はロッカーの中から、フラットファイルに綴じられたインシデント記録の冊子を、龍二の前に置いた。

「どうされました。何かありましたか」

道中が覗き込むようにして、声をかけてきた。

「ちよつと、気になることがあって」

曖昧な返事をして、最近三ヶ月のインシデント記録に目を通していった。

インシデントとは、入所者の身に直接影響がなかったが、その一歩手前で事故が起きなくて済んだという事項のことで、冊子にはその記録が綴られている。例えば、食物が咽に詰めそうになったとか、身体に小さな傷や痣があるとか、薬の配布を間違えて他人の薬を飲ませてしまいそうになったこと。その原因と反省、それに防止策が、その入所者に関わった職員か、見つけた職員によって書かれていた。

その記録を職員に回覧することによって、職員間の情報を共有し、同じインシデントを繰り返さない。強いては大きな事故を起こさない予防措置となる。

机上の電話が鳴り、受話器を取ると医務課長からだった。

「事務長、先ほどの竹中さんの件ですが、やはり顔をベッドの転落防止の金具で打ち付けています。打ち付けたところは青く内出血していました。その後、うつ伏せになったまま、寝返りを打つ体力がなかったので、血液が顔中に鬱血していたようです」

看護師である医務課長は、龍二が依頼した竹中留子の症状を伝えてきた。

「長時間うつ伏せになっていたことは、ひとつ間違えば、窒息死になっていた可能性もあったということではないのか」

「危なかったです。鼻孔とベッドの間に隙間があったからいいよう

なもの、高齢者は自分で寝返りが打てない方もいます。特に職員が少ない夜勤は、巡回時に事故が起きないように、しっかりと確認をしてもらわないと困ります。事務長から夜勤者に周知してください」

少し感情的になっているのか、トーンの高い声での報告だった。受話器を置き、龍二は冊子に視線を戻した。気になるインシデントのページに付箋を貼り、ゆっくり冊子を閉じると、立ち上がり道中の席に近づいた。

「道中課長、相談室まで来てくれないか」

「わかりました。すぐ行きます」

玄關ロビーの片隅に、衝立で囲んだ簡単な相談室が設けられていた。来客者が入所の相談に来たときなどに使われている。テーブルを挟んで、龍二は竹中留子の出来事を、かい摘まんで道中に話した。

「危なかったですね。竹中さんの家族はクレーマーです。家族会で息子さんから母親への介護が悪いとか、もっと外に連れ出して気晴らしをさせてほしいとか、いつも権利主張をする家族です。気をつけないと、苦情の対応に振り回されてしまいますよ」

「わかっている。だから総務課長である君に相談しているんだよ」

「はあ、それで相談とは？」

道中は呼び出した意味を察したのか、声を潜めるようにして、顔を龍二に近づけてきた。

「朝から、最近三ヶ月のインシデントに目を通してみた。その中に竹中さんのインシデントが八件も出ている。それも時間帯は深夜で、内容は痣がほとんどだ。多いとは思わないか」

「竹中さんのインシデントを書いているのはだれですか。書いた職員が虐待をしているということですか」

「記録者は、竹中さんの痣を見つけた職員であって、必ずしもその職員が虐待しているとは限らない。竹中さんは、ほとんど喋らない。だから虐待をされていても、他の職員に訴えることができない」

「じゃどうすればいいと、お考えですか」

「介護課から総務課に出てきている毎月の勤務表から、竹中さんの

インシデント八件が書かれている日の、前日の夜勤者を調べてほしい。他言は無用だ。犯人捜しの噂が流れると、職員間で動揺が起こるから、極秘で頼むよ」

龍二は自席に戻った。介護職員不足の不満から、職員が入所者を虐待しないか。不安が脳裏をよぎる。道中の席に視線を向けると、先ほど頼んだ夜勤者を調べているようだった。

「事務長、竹中さんのインシデントの件ですが、八件のうち七件の夜勤は村津です。どうしますか」

道中は、龍二の机の前に立ち少し腰を曲げ、他の職員に聞こえないように、小さな声で話しかけてきた。

「どうするって、村津がやったという証拠も何もないんだ。まだ推測の域を越えていないんだから、他言しないようにしてくれ」

道中は、うなずき自分の席に戻っていった。

今日の出来事を施設長に、どう報告すべきか迷った。「職員管理もできないのか！」と叱責されるような気がした。しかし、このまま黙っていて、事件でも起きれば、「なぜ報告をしなかったんだ！」と、怒鳴られるのはわかりきっていた。

龍二はゆっくり席を立ち、施設長室がある二階に向かって階段を上がった。

施設長室の前に立ち、一呼吸してからドアをノックすると、中から「はい」の返事が聞こえ、ドアを開けた。

施設長は机で何かを書いているようだったが、龍二の顔に視線を送ってきた。ペンを置き老眼鏡を外してから、部屋の中央に置かれているソファアを勧めた。

「おはようございます」

龍二は施設長に、声をかけ一礼してから、ソファアに座った。施設長が対面のソファアに座るのを待ってから話しかけた。

「今朝、施設内を見回っておりますと、二階入所者の竹中さんの顔面が赤黒くなっているのに気づきました。原因について医務課長に診てもらいましたら、昨夜ベットの落下防止金具に顔面を打ち付

け、その後うつ伏せになっていたので、血液が顔面に鬱血したもようです」

施設長の表情を窺ったが、手に持っている老眼鏡のレンズを、ハンカチで拭いていた。

「それで、どうしたんだ」

一瞬、龍二は次の言葉に詰まってしまった。

「はあ……顔が下になっていたので、一つ間違えば窒息死の可能性があったのではないかと、一応施設長に報告しておこうと思ひまして」

施設長は、老眼鏡を拭く手を止め、ぐりつとした大きな目の玉を龍二の方に向けた。

「ともかく大事故にならなくてよかったが、今後は注意することだ」

「申し訳ありません」

いつも結果論で追求してくる施設長に、苦い思いを抱きながら、ソファーに座ったまま頭を下げた。

「何も君に謝ってほしいなんて言っていない。それで、昨夜の夜勤は誰なんだ」

龍二は、始まったと思った。施設長は、いつもじわじわと攻め込んでくる言い方をする。

「村津君です」

「無精髭を伸ばしている男だな。それで事務長は村津君に何と云ったのだね」

「特別何も言っていないません。施設長に報告するのが先だと思ひまして」

「君は、『鉄は熱いうちに打て』ということわざを知っているだろう。そのときに注意をしなければ、時間をおいて、冷めてから注意しても、効き目は半減してしまう。そんなことは事務長だったらわかるだろう」

「言われるとおりでです。以後気をつけます。今から、介護課に行つて、村津君に注意をします」

「昨夜夜勤だったら、今日は明けで、もう帰ってしまっているのではないのかね」

龍二は自分の愚かさに、がっくりした。こんな初歩的なことを施設長から言われ、苛立ちを覚えた。

「それでは、村津君は明日は休みですので、明後日の朝、注意をしておきます。失礼しました」

龍二は、立ち上がり、施設長に軽く一礼してから、部屋を出ようとした。これ以上居たら自分の愚かなところが出て、施設長に小言を言われそうな気がした。

「虐待はないだろうね」

施設長からの突然の言葉に、龍二は返事に迷った。先ほど道中に調べてもらった村津の夜勤時に、竹中留子のインシデントが起こっていることを、話すべきかどうか悩んだ。今の中途半端な状況では話せない。虐待の可能性をほのめかせれば、その内容を追求されるのはわかっていた。

施設内で虐待が起こったとなれば、患者を救う立場にある精神科医として、許されない気持ちになるのだろう。

施設長は十五年前に、民間病院の勤務医で貯めた私財を抛出し、特別養護老人ホームの運営を始めていた。当初施設長職は、他の施設から経験のある職員を雇い六十歳定年で退職したのを機に、五年前施設長に就いた。今は施設の嘱託医と運営母体である社会福祉法人の理事長を兼ねている。

施設長が勤務医の頃は、毎月一回の経営会議での収支報告と、適宜施設に立ち寄ったときなど、月に数回顔を合わす程度であったが、勤務医を辞め常勤の施設長に着任してからは、毎日顔を合わす機会が増え、いささか気疲れがする。

「はあ……虐待はないと思いますが、念のため調べております」  
慎重に言葉を選んで応えた。

「嘱託医として入所者の診察をしたとき、竹中さんの身体に痣があったのを何回か見た記憶がある。今回のことと、何らかの関係があ

るのではないだろうね」

「それも含めまして、調べてみます」

内心どきりとした。施設長が気がついてしまったようだ。

「事務長は『転ばぬ先の杖』の、ことわざを知っているだろう。言っている意味がわかるかね」

「十分承知しております」

龍二は深々と頭を下げ、施設長室から退席した。施設長が言ったことわざの意味から考えて、今回の件は、念には念を入れて用心して対処せよと理解した。

竹中留子の虐待と考える証拠は掴んでいない。まだ推測である。もし間違っていたら人権問題だ。慎重に事を運ばなければならぬ。そんなことを思いながらゆっくり階段を下りた。

龍二は事務所に戻ったが、親しく腹の底から愚痴をこぼせる職員がいない。事務長と言えば、施設長に次ぐポストであり、見栄えが良いかもしれない。現実はおーナーである施設長に気遣い、部下に十分働いてもらうために、言いたいことを半分に抑え、気を使いなから指示を出している。

龍二は職場の孤独を癒やすために、職場の外に生きがいを持っていた。その生きがいとは「ナナミ」である。

ある風俗の会員クラブで見つけた彼女。両方の頬にできるえくぼ、口元から覗く八重歯、それにパッチリした目、スタイルはスレンダーだ。身長は156。スリーサイズは、82、55、83、年齢は二十二歳。出会って一目惚れをってしまった。

女優の大島優子に似ていた。土曜日の週一回しか出て来ない。平日は派遣会社に籍を置き、病院で医療事務をしていると言った。休みの日に会員クラブで、バイトをしているのである。

龍二は今日の朝、出勤途中に会員クラブへ連絡を入れ、予約優待券を使って、ナナミを今週の土曜日に指名予約した。彼女と逢えるのは一ヶ月ぶり。毎週でも逢いたいのだが、ナナミを指名する客が多く、なかなか予約が取れない。彼女と肌を合わすことができるな



たらしい。部屋が散らかっていて、入れ忘れに気づかなかった。

龍二は還暦を迎えてから、性欲が減退しているのを感じ、バイアグラを飲むようになった。今から家に取りに帰る時間はないし、キヤンセルをするわけにもいかない。遅れて会員クラブに行けば、遅れた時間は予約の時間に組み込まれ、ナナミと接する時間が短くなる。

やっと得た予約優待券で、彼女を指名できたというのに、バイアグラを忘れてきたのである。頭の中が真っ白になった。

「なんてことだ」

ナナミとのプレイを期待していただけに、自分のドジに落胆した。今の現状を悔やんでも仕方がないことはわかっていた。このまま突撃するしかない。テーブルの上に置かれた伝票に取ると龍二は立ち上がった。

ビル内のエレベーターに乗り込み、開閉ボタンを押す。少し緊張しているのが、自分でもわかる。エレベーターの扉が開き三階で降りる。小さなホールがあり、その先に、『ココナッツクラブ』と書かれた、黒い大きなドアが行き先をふさいでいた。ドアの横のインターホーンを押した。

「どちら様ですか」と男性の声がした。

「予約していた沢です」

少し間をおいて、ドアが開いた。目の前には、白のワイシャツに黒ズボンの男性がいて、会員証を確認した。中に入ると真ん中に廊下が続いており、両側が何室かの個室に分かれている。その一つの個室に、ナナミが待っているのである。

手前の一室が待合になっており、毎回この部屋に入るまでが緊張する。待合室のソファーに座ると、

「予約の女の子の名前と時間をお願いします」

先ほどの男性店員が聞いてくる。

「ナナミさんで、百二十分です」

「予約優待券と、もう一度会員証をお願いします」

手提げ鞆から取り出し、店員に渡した。

「お飲み物は、コーヒー、ジュース、お茶がありますが」

「コーヒーを」

店員は、素早くカップにコーヒーを入れてテーブルの上に置いた。

その間にも、廊下で足音がしたと思ったら、「ありがとうございます」と別の男性の声がした。帰るときは相手した女性が受付へ連絡を入れ、廊下で客同士が顔を合わさないよう調整をしていた。

この会員クラブは、会員の紹介がなければ入会できない。龍二は高齢者施設連絡会で知り合った他の施設の事務長と、一緒に飲みに行ったときに、紹介してもらったのである。

来店のたびに、会員証に店印が押された。押印が溜まれば、予約優待券や指名無料券が、もらえるシステムになっていた。

「撮影行為、スカウト行為、暴力暴言、店舗外の勧誘行為、衛生用品着用拒否は、禁止行為となっております」

店員は、暗記をしているのか、事務的な言い方だった。龍二は軽くうなずいた。

「トイレは、大丈夫ですか」の問いに、先ほどの喫茶店で済ませていたが、念のため待合に備え付けられたトイレに入った。

「それでは、よろしいですか」と言って、龍二の口の中に口臭消しのスプレーをする。男性店員は先に立って個室の前まで案内し、ドアをノックして開けた。

部屋の中に一歩踏み込むと、そこには笑顔のナナミが立っていた。龍二に近づきキスでのお出迎えである。

優しく唇を押しつけてくる。甘ったるい味がする。彼女の腰に手を回し引き寄せ、ブラウスの上から抱きしめ唇を吸った。この瞬間が好きだ。二十二歳のナナミを百二十分間、龍二が好きなように相手してもらえる時間なのだ。

六十代の男が、二十代の青春時代に戻った気持ちになる。彼女との関係をお金で処理できることも、気分的に楽である。この歳にな

って男女関係の、もめ事はつくりたくないし、精神的にも疲れる。

ナナミと時間内にできる性行為は、肉体的に二回は無理である。余った時間は話をする。互いの裸身を重ね合わせたまま、若い女性との他愛もない会話に、気持ちが和らぐ。

話の中から彼女の仕事は、病院での医療事務で、「国保連合会と社会保険支払基金へのレセプトデータを、パソコンでオンライン請求している」と言った。龍二も職業柄、話のネタには不自由しなかった。

ナナミは龍二の手を握って、奥に置かれているベッドまで案内してくれた。二人は腰をかけ、キスをし、舌を絡み合わせた。

「シャワーをあびましょうか」

そう言っただけ彼女は龍二が着ているスーツのボタンに手をかけた。そしてズボンのベルトを緩め、ファスナーを下ろし脱がしてくれた。

ナナミはブラウスとスカートを脱ぎ、下着を取ると浴室の椅子に案内した。龍二の横に立ち、シャワーの蛇口を持って、温度調節をしてから、肩口に生暖かい湯を流してくれる。ボディソープをスポンジに染みこませて、泡を立て、龍二の腕から胸、背中、順にスポンジを這わせた。身体全体に湯を流して終わりである。

龍二は何もせず座っていたが、頭の中は、勃起するかが気になっていた。彼女がペニスを洗っても反応を示さないのである。不安な気持ち広がった。

身体を洗い終わると、裸のままベッドに移動し抱き合った。気分が高まっていく。彼女の小さい柔らかかなおっぱいを吸った。弾力のある白い肌がまぶしく思える。

ペニスを握り愛撫をしてくれた。気持ちいい。やっとなんか大きくなり、その気になってきた。衛生用品を着け、ナナミの上から正常位になって、挿入をしようとしたとき、硬くなっていたペニスが柔らかくなる。下半身に力を入れ、精神を集中させたが反応を示さない。やはりバイアグラを忘れてきたことが、致命傷となってしまう。

「どうしたの？」

彼女は異変に気づいて声をかけてきた。

「だめなようだ。できない。歳だな」

トーンの落ちた声になった。前回までセックスができたのは、バイアグラを使っていたからとは言えない。

「二十歳代の若いお兄さんでも、この頃勃起しない人もいるのよ。そんなお客さん何人も相手したことあるよ」

彼女はそう言って、龍二の胸の中に顔を埋めてきた。

「そうなのか。その若いお兄さんは、強度の緊張で立たないのかも知れないな」

彼女の黒髪をゆっくり撫でた。ナナミは龍二の落胆した気持ちを察してか、優しく接してくれる。年齢が二十代でも男の扱いは慣れていた。彼女とセックスができなくても、こうして肌を合わせているだけで癒やされる。思い切りナナミを抱きしめた。

「また、リベンジしてくださいね。次回はきっとできますから」

そう言って別れ際にキスをして、笑顔で送り出してくれた。時間いっぱい甘えてくれて、満足がいく時間を過ごすことができた。

それでも、男として好きな女を前にして、セックスができなかったことに、気持ちが沈んだ。

「リベンジしてくださいね」彼女の言った言葉が、落ち込んだ精神に染みる。男として復活しなければならぬ宿題を背負ってしまった感じだ。

「次回は確実に、ナナミへ再チャレンジだ！」龍二は、そう自身身に言い聞かせることによって、明日への活力を絞り出した。

今日は木曜日。竹中留子の痣を見つけてから一週間が経つ。その間、龍二は村津と一緒に仕事をしている職員に、職場内の出来事を内々に聞いて廻った。村津が虐待をしたという決めつける証言はなかったが、驚く事を耳にした。

それは入所者である宮本弘枝の家族が面会に来ているときに、宮

本弘枝が横に立っていた村津を指さして「この人に、叩かれた」と言ったのである。家族はその言葉を聞いて「そんなことあるわけないやろ」と、笑い飛ばし、その場は大事にならなかった。村津と一緒に同席していた相談員が、そんな会話を聞いていたのである。

宮本弘枝は、少し認知症が入っていたので、家族も取り合わなかったように見えるが、内心はどう思っているかわからない。認知症の身内を預かってもらっている手前、平常心を装っているが、確信が持てれば、クレームを付けてくるのはわかりきっている。

施設長が言っていた『転ばぬ先の杖』のことわざが、脳裏にちらつく。龍二は、二階の介護課に電話をかけた。

「朝のミーティングで忙しいと思うが、終わったら井上課長に事務所へ、来るように言ってくれないか」

しばらくして井上が事務所に入ってきた。ロビーの相談室に移動し、テーブルを挟んで座った。

「井上課長は、宮本さんが面会に来た家族の前で、横に立っていた村津を指して、叩かれたと言ったことを知っていたのか」

「又聞きですが、聞いていました。でも宮本さんは認知症が入っており、本当かどうかわかりません」

「君の言い訳を聞いているのではない。どんな小さな事でも虐待に関することは、私に言ってほしい。宮本さんに認知症が入っているからといっても、村津を指すからには、過去に村津から叩かれている可能性があるのではないのか」

「はあ……」

井上は困惑の表情を浮かべた。

「何も言いたくて、こんな小言を言っているのではない。職員による高齢者虐待は、施設の存亡に関わることだ。事件が起こってからでは遅い。少しでも可能性があれば、その芽を摘んでしまわなければいけないんだ」

「わかりました。今後は小さな事でも、事務長に報告します」

「もう少し聞きたいんだが、村津は入所者から慕われているのか」

「それは無いと思います。いつもマイペースでやっています。たまに言うことを聞かない入所者を、大声で叱っているのを見たことがあります。注意をしたら、それから私には必要以外、口を開かなくなりました」

「一週間前に、竹中さんの痣を見つけてから、最近三ヶ月のインシデント記録を調べてみたんだ。そしたら、竹中さんのインシデントが八件出ていた。そのうち七件が、深夜に何らかの痣ができています。そのときの夜勤が村津なんだよ」

龍二は顔を井上に近づけて、声のトーンを低くした。

「本当ですか……」

井上は、考え込んでしまった。

「村津が、入所者に対して虐待をやっていると思うかね」

「そうですねえ。普段の少し反抗的な態度を見ていると、自分の中に溜め込んでいる鬱憤を、入所者にぶつけている可能性はあると思います」

「村津に対して、どう対応すべきだと思う」

「問い詰めてはどうでしょうか」

「虐待をやっていないと否定されれば、それまでだ。それに証拠も無しに、犯人扱いをしてみろ、噂が広がって職員は動揺するだろうし、それに、管理職に対する信頼度が落ちて、仕事に支障をきたすおそれが出てくる」

「困りましたね」

井上は思案顔をした。龍二は腕組みをしたまま、少し考え込む仕草をしていると、ロビーを横切る道中の姿が見えた。

「道中課長、ちょっと話があるんだが、いいかな」

龍二は顔を出し呼び止めた。道中は相談室の中を覗き込むようにして入ってくると、井上の横に座った。

「井上課長と話をしていたんだが、宮本さんが家族の前で、村津に叩かれたと言ったらしい。どう対応すべきか思案しているところだったんだ」

龍二が言ったあと、井上は話の経過を道中に喋った。

「そうですか、入所者が家族との面会で、介護職員に叩かれたという話が出たことは、まずいですね。家族会など皆が集まっている場で、宮本さんの家族が『入所している母親から、職員に叩かれたと聞きました』と、発言でもされたら、大変なことになりますよ。他の家族から高齢者虐待だと騒がれます」

道中は、困った表情をして言った。

「宮本さんが少し認知症が入っているからといって、冗談では済まされない。施設の信用問題に発展してしまう可能性だってある。慎重な対応が必要だと思うんだが」

龍二は二人の目を見て言った。

「施設長への報告は、どうされますか」

道中が聞いてきた。総務課長をしているので、施設長の性格は読み切っていた。

「それなんだよ。報告すればしたで、今まで職員にどんな指導をしていたんだと、文句を言われるだろうし、報告をしなければ、事故があったときに、君らだけで責任が取れるのかと、小言を言われそうだ」

「ある程度、結論を出して施設長に報告したらどうですか」

「結論を出すとはどういうことだ」

龍二は道中に問うた。

「村津の虐待と思われる行為は、職員の少ない夜勤のときに起きています。例えば、夜勤のない他の部署へ異動させる方法などはどうですか」

道中が、小さな声で応えた。

「年度途中に人事異動か」

「四月の定期異動の時期まで、待てないでしょう。それまでに事件が起きたら、どうするんですか。それに宮本さんの家族が、不審に思っていると思います。村津が異動で介護現場にいなければ、素早く対応した施設側の対応に、不審が取り除かれるのではないです」

か」

「どこか適当な異動場所はあるのか」

「デイサービス部署ではどうですか。夜勤はありませんし、前から職員を増やしてほしいと、要望が出ています」

道中の提案に、龍二は道理を感じたが、簡単に村津が異動に同意するかどうか。職場を辞めてしまう可能性だって考えられる。この異動が他の職員から見れば、村津に対する安易な嫌がらせに映り、他の職員までが辞めると言い出しはしないかと不安もある。

「少し考えさせてくれないか。この件は誰にも喋らないように」

そう念を押してから、龍二は事務所に戻った。

女子職員が入れてくれたコーヒーをゆっくり飲みながら、どう対応すべきか考えた。

インシデント記録から、村津の竹中留子への虐待が疑われるが、確証はない。それに宮本弘枝の「村津に叩かれた」という発言も、まんざら嘘とも思えない。

事件が起こってしまったから後悔するよりは、その原因の芽を摘んでおく方が得策である。施設長に判断を仰げば、事務長が何事にも自分で決められない無能であることを、暴露しているようなものである。施設長には、はっきり方向性を出してから報告することにした。

村津には虐待の話を出さずに、異動通告をした方が無難のように思えた。出しても否定されるのはわかりきっている。それよりも虐待の話が漏れて、「虐待の濡れ衣を着せられた」と、村津に職場内で言いふらされたら、職員間に管理職への不信感が広がってしまう。

そう考えると、悠長なことはしておれない。早く異動通告し、事を進めなければならぬ。『事が延びれば尾鰭が付く』という、ことわざがある。事が延び延びになると、とにかくよけいな問題が起こって、やりにくくなる。事はできるだけ早く処理せよ、ということである。

龍二は道中に声をかけ、自席に呼んだ。

「今日の村津は、日勤で朝からの出勤となっていたな。すまないが、手の空いた時間に三階の会議室まで、来てくれるよう言ってくれないか。例の件で異動の話をするつもりだ。道中課長も同席してくれないか」

「ええ！ 今からですか。そんなに急ぐんですか」

道中は驚きの表情をしたが、龍二は話を進めた。

「先延ばしにしていたら、どんな邪魔が入るか分からない。事件が起こつてからでは遅いんだ。十二月一日に人事異動の辞令交付を行う」

龍二は力強く言った。

「あと二週間しかありませんよ。施設長の了解は大丈夫ですか」

道中が不安な表情を見せた。

「一ヶ月遅らせれば、それだけ新たな問題が生じる可能性だってある。同じやるなら早い方がいいのに決まっている。施設長には事情を話せば、わかってくれるはずだ」

龍二は睨み付けて言った。道中はうなずき、事務所を出て行った。しばらくして机の上の電話が鳴り、受話器を取った。

「事務長、今からでもいいと言っているので、村津と一緒に三階の会議室に行っています」

道中からの電話だった。受話器を置き会議室に向かった。

会議室のドアを開けると、会議机を挟んで道中が右側に、左側に村津が座っていた。龍二は道中の横に座り、村津の顔を正面から見る。

「忙しい中、呼んですまなかったね」

龍二は、村津に向かって低姿勢でゆっくりと、話しかけた。

「忙しいんで、用件を手短にお願いします」

村津は龍二の顔に視線を向けて喋る。

「それでは用件を言おう。来月からダイサービス部署に異動してくれないか」

一瞬、村津の表情に動揺が走った。

「それはどういう意味ですか。それに、あまりにも急ではないですか。納得できません」

「デイサービスで増員の要望が出てきているんだ」

「どうして僕なんですか。拒否したらどうなるんですか」

「異動は、施設運営をするに当たって、総合的な判断で行うものなんだ。拒否はできない」

龍二は強い口調で言った。

「他の職員でもいいのではないですか。異動の理由を教えてください」

村津の顔面が紅潮していた。

「先ほども言ったように、人事異動は総合的な判断だ。教える必要はないと考えている」

「拒否できないんだったら、辞めますよ。それでもいいんですか」

龍二は、内心やっぱり来たかと思った。しかし、ここで引き下がるわけにはいかない。

「辞めるかどうかは、君が判断することだ」

介護職員が不足している現状を考えると、辞められるのは痛い。が、事件が起きて、テレビ報道や新聞に掲載されることを思えば、断行するしかない。

沈黙が続く。村津は鋭い目つきで睨んでくる。ここは視線を反らすわけにはいかない。

「デイサービスに移ると、夜勤手当がなくなるから、給料が減るんですよ。家を建てたところで、住宅ローンを払わなければならないんです。困ったなあ。夜勤手当分給料を上げてくれませんか」

村津はしかめた顔をして、弱々しい声で訴えた。今度は泣き落としにきたかと思った。

「君だけ特別な扱いはできない」

ここは踏ん張りどころである。龍二は一步も譲らなかつた。妥協すれば、振り出しに戻ってしまう。村津の表情から住宅ローンは、

本当の話であることは察しがついた。龍二は、困った表情の村津に視線を送りながら、立場の弱い者を痛めつけている罪悪感を覚えた。

道中は隣で、龍二と村津の会話をノートに記録している。後で言った言わないのトラブルが起きないよう、記録を残そうとしていた。

「嫁さんと相談してみます」

龍二は、村津が一步引き下がったと思った。

「来週の月曜日に、返事をもらえないか。異動の一週間前には、ロビーの掲示板に内示を貼り出すから」

村津は、龍二の言葉を聞くと、すぐに立ち上がり、会議室を出て行ってしまった。

「何とか村津は、納得してくれたようですね」

道中が、ほっとした表情で話しかけてくる。

「まだわからんよ。辞めるかもわからないし」

村津の返事があれば、内容がどうであれ、施設長に報告しなければならぬ。

龍二は会議室の掛時計を見た。十一時五十分に針が指していた。道中に「ご苦労さん」と言って、会議室を出た。ゆっくり施設の職員駐車場に停めてある車まで歩き、運転席に乗り込んだ。ポケットから携帯を取り出し、正午になるのを待った。

携帯のデジタル時計が十二時になるのを確認してから、会員クラブに電話を入れた。プー・プーという話中音が鳴り、相手側に繋がらない。すぐに電話を切り、また会員クラブに電話を入れた。またプー・プーと話中音が聞こえる。電話を切り、また電話を入れる。予約は先着順で入っていく。相手側の受話器が置かれた瞬間に、こちらの呼出音が入らなければ、電話は繋がらない。一秒でも早く、時間を無駄にできない勝負である。五回ほど繰り返したとき、

「はい、ココナツクラブです」

男性の声が携帯から聞こえてきた。相手側に繋がったのである。

「今週の土曜日で、ナナミさんの予約が取れる時間帯はありますか」

「少しお待ちください」

そう言われてから、少し間が空く。特別会員の予約時間帯であっても、電話が繋がりにくいのは、人気の高い女性が多いためか、予約客が殺到しているのだろう。

ナナミの予約が取れなければ、来週にまた再チャレンジするしかない。他の女性を指名することも考えたが、やはり彼女の笑顔でなければ、心が癒やされない。

「ラスト一枠。午後三時から二十分コースなら空いております」

男性店員の言葉に、龍二の表情が緩んだ。

「それで、お願いします。名前は沢です」

「当日予約時間の、一時間前に確認の電話を入れてください」

毎回店員から言われる言葉に、返事をして携帯を切った。

龍二が車から出ると、頭上から太陽が照りつけていた。まぶしい空を見上げ、運が付いていると感じた。この調子だと、村津の件も案外うまく事が運び、施設長を納得させられるのではないかと思っただ。

今日は土曜日、昼過ぎに家を出れば間に合うと思いい、目は覚めていたがゆっくり寝ていた。妻とは数年前から別々の部屋で寝ている。その方が気楽で、お互い余分な干渉をしないことが、二人のルールになっていた。

十時に起きると、リビングやダイニングに妻はいなかった。犬の散歩に行ったらしい。娘が嫁いでは、妻との二人暮らしである。会話は生活に必要な言葉しか話さない。

窓から外を覗くと、青空が見えた。食パンを焼き、牛乳を暖めて朝食を済ませる。使った食器を洗ってから、洗面所の鏡の前に立つ。ナナミの顔が頭の中に浮かぶと、にんまりとした男が目の前に映っていた。

彼女を抱きしめたときに髭剃りあとが擦れて、痛くないように丁寧に髭を剃る。キスをしたときに、少しでも清潔感を保つために、入念に歯を磨く。顔を洗い、肌を潤いを与えるためにクリームを塗る。

普段着から気に入っている黄色いポロシャツと、ベージュのズボンに穿き替えた。まだ時間があるので、テーブルの上に置いてある新聞に目を通したが、興味がある記事は載っていなかった。時計を見ると十二時になっていた。少し早いが出ることにした。

「いい天気だから、六甲山をぶらついてくる。夕食はいらない」

犬の散歩から帰ってきて、リビングでテレビを見ている妻に声をかけた。もちろん妻には女遊びをしているとは言っていない。お互いの行動には無関心を装っているが、言えば不愉快な気持ちにさせるのは、わかりきっていた。

「そうなの」

必要最小限の言葉が返ってくる。

玄関を出てカーポートに停めてある車に乗り込む。手提げ鞆にバッグが入っていることを、確認してから家を出る。

神戸の街へ続く有馬街道を走る。途中時間潰しも兼ねて道路沿いに車を停め、紅葉の山並みを見て何回も深呼吸をした。気分が爽快である。龍二は『分相応に風が吹く』のごとく、人生を過ごせることに満足を感じた。

いつもの駐車場に車を置き、近くの喫茶店に入る。腕時計で午後二時を確認すると、ポケットから携帯を取り出し、会員クラブに電話を入れた。

何回かの呼出音がして「ココナッツクラブです」男性の声がした。「予約確認の電話です。ナナミさんを三時から百二十分。沢です」少し間を置いて「確認できました。十分前に来店ください」そう言うて電話は切れた。毎回同じことの繰り返しである。

電話をした後、手提げ鞆を開けてバッグを取り出し、一錠を口に含み、水と一緒に飲み込んだ。どことなしか緊張しているのが

わかる。気分を和らげようと、ゆっくりとコーヒを飲む。

そのとき、テーブルの上に置いておいた携帯が鳴った。

「事務長、井上です。一時間ほど前に、宮本さんがスロープのところで、車椅子に乗ったまま壁に当たり、右腕を骨折しました。原因は車椅子のブレーキが掛けられていなかったみたいです。宮本さんの相手をしていたのが、新人職員の依藤美佳で、聞いたらブレーキは掛けていたと言うんです。嘘を言っているとは思えませんし、誰かが故意に外した可能性があります。依藤は狼狽し、泣いてしまつて困っています。今すぐ施設に来られませんか。詳しいことは、そのときに話します」

井上は一気に喋った。龍二は携帯を聞きながら、宮本さんの家族への対応を考えていた。高齢になれば骨が弱くなり、ちよつと打つただけで骨折する場合がある。これは仕方がないことだが、家族への対応を誤れば、問題を大きくしてしまうことを、経験してわかつていた。

「宮本さんは、病院に行っているのか」

「はい。腕が痛い痛いと呼ばれるので、職員が病院に連れて行って、レントゲンを撮ってもらったら骨折とわかったんです。今連れて行った職員から連絡があったので、事務長にお知らせしているところです」

「家族には、井上課長から、今すぐに連絡を入れるんだ。宮本さんが車椅子の操作を誤って、腕を打って骨折したと。病院での診察内容も丁寧に報告するんだ。最後に施設内での事故ですので、完治するまで病院への支払い及び通院送迎は、施設側が責任を持って、させていただきます。と言うんだ。そのように対応してくれないか」

「わかりました。これから家族に連絡しておきます。それとブレーキの件は……」

「その件は……、今は出かけていて家にいないんだ。これから人に会う約束になっている。家に帰るのは遅くなる。明日は日曜日だから、月曜日の九時前には出勤する。そのときに、じっくり相談しよ

う。……今日の村津の勤務表はどうなっている」

「今日は日勤で、朝から勤務をしています。ひよっとして村津が……」

「あくまでも推測だ。他言は無用だ。それと入所者が平静さを失わないように、普段どおり対応するんだ。それから依藤美佳のことだが、ショックを受けていると思うから、宮本さんと家族への対応は井上課長がするから、心配しなくてもいいと、慰めてやってくれないか。辞められると困るから、頼んだよ」

龍二は携帯を耳から、ゆっくり離した。今からの出来事を思うと、出鼻をくじかれた感じだ。

腕時計を見ると、二時四五分を指していた。急いで喫茶店を出て会員クラブに向かった。

「逢いに来てくれたのね。うれしい」

ナナミの部屋に入ったとき、彼女はそう言って抱きついてきた。両手を背中に回し強く抱きしめた。黒い髪の中に顔を埋めると、若い女の匂いが漂ってくる。この瞬間がたまらない。そして顔を起こしキスをした。唇の感触が柔らかく、舌を入れて絡ませた。ペニスが徐々に勃起してくる。彼女の身体に押し当てた。気持ちが高揚していくのがわかる。バイアグラの効果が出ていた。

龍二はナナミをベッドに押し倒し、上から覆い被さる。衣類を剥ぎ取り、白い肌を舐め回した。この時間が好きだ。何も考えず、欲望だけを前面に出し、性欲を満たすために身体が本能的に動く。

「ちよっと待って、シャワーを浴びてから、ゆっくり楽しんだらどうかしら。時間もあることだし」

笑みを含んだ顔が、目の前にあった。彼女の言葉に、龍二は我に返り、自分は何を焦っているんだと思った。百二十分あれば、急いでセックスをしなくても、ナナミなら時間を有効に使えるよう気遣いができる。

「そうだな、急ぐ必要はない。前回のことが頭に少し残っていたも

のだから、焦ってしまったみたいだ」

「今日は、リベンジで来てくれたのね。ありがとう」

龍二は、先ほどまで残っていた緊張感が取れていく気がした。

二人で一緒にシャワーを浴びる。ペニスが先ほどから勃起していた。彼女は龍二の身体にボディソープを流し、隅々まで洗ってくれる。

「仲良しさんは、何歳になるんですか」

ナナミは、龍二のことを『仲良しさん』と呼んでいた。理由を聞くと、話をするときは、相手の呼び名が必要だし、それに『お兄さん』の呼び名では、歳が離れすぎていると言った。彼女の説明に納得した。

「なぜ歳なんか聞くんない」

「だって、こんなに元気になっているもの」

ナナミは、ボディソープで龍二の股間を洗いながら聞いてきた。老年期に入っている男のペニスが、あまりにも大きくなっているのを見て、本当の年齢を知りたくなったみたいである。

「六十二歳だよ」

龍二は、バイアグラのことを言わなかった。薬を飲んで大きくしていることが、不甲斐ない気持ちにさせる。それに老人に近づいた年齢を認めたくはなかった。

「まだまだ現役ですね」

「君といると、身体が反応してしまうんだ」

そう言って、彼女を抱き寄せた。

「前は、いろいろ考え事があったからか、身体が反応しなかったが、今日は大丈夫だよ」

龍二はナナミの耳元で、前回来たときの言い訳じみたことを、話さずにはいられなかった。セックスが出来なかったことを思い出すと、気恥ずかしい気持ちになる。そんな気持ちを払拭したくて話した。その方が、今日を楽しめる気がしたからだ。

「ベッドに行こうか」

彼女がうなずき、二人はベッドに移動した。

ナナミの身体に唇を這わす。気持ちが高揚したところで、衛生用品を着け挿入する。龍二は正常位で彼女を攻めまくった。背中につきすらと汗が浮き出てくるのがわかる。なかなか射精するところまでいかない。バイアグラを飲んでペニスが勃起することと、射精することは別問題なのだ。

ナナミは小さな声を漏らしながら耐えている感じだった。汗が噴き出したとき下腹部に快感を覚える。なおも運動を繰り返し精液を放出した。

龍二は身体的疲労を覚えたが、満足感を味わうことができた。ちょうど登山で山の頂上に立ったときの、爽やかな疲労感と同じである。若いときと違って、六十歳を過ぎてからのセックスは、一回、一回が自分自身との真剣勝負である。性行為はメンタル面の影響が大きい。失敗すれば自信喪失になり、再起不能に陥る可能性だってある。

「仲良しさん、お若いですね。わたし、いつてしまいました」

ナナミは、龍二の胸の上に顔を置き抱きついてきた。そっと彼女の背中に手を添えた。

「少しハードで、すまなかったね」

「いいですよ。気持ちよかったです。前回に比べて今日は、あまりにも元気なので、びっくりしました」

「今日は体調がいいんだ」

「老人ホームにお勤めでしたね。お忙しいのに、何回も来てくださって、ありがとうございます」

ナナミは龍二の乳首を指先でいじりだした。

「君は好きなタイプだ。逢っていると気が休まるんだよ。仕事が忙しいからこそ、息抜きが必要なんだ」

「うれしい」

身体をすり寄せて、甘えてくる女は可愛く思えた。

「平日は医療事務の仕事をして、休みの日には、ここでバイトをし

て、大変だろう」

「バイトが終わったら、くたくた。でもリピーターの方が多いから、お話をしたりして、休ませてくれるから、ありがたいと思うわ」

彼女のバイトは、肉体と精神を使った重労働であることは、推測できた。どうして、こんなバイトをしなければならないのかと、同情をしたくもなるが、理由は聞かない。それはタブーだからだ。

「君のファンが沢山いそうだが、私もその中の一人に加えてほしい」

「うれしいです。こちらこそお願いします」

ナナミはそう言って、顔を上げキスを迫ってきた。こんなやりとりが龍二は好きだった。

他の者から見れば、ばかばかしい話の内容であり、また無駄遣いの行動であると思われるが、老年期に入った男の生きがいである。人生最後の男と女の関係なのだと、龍二に悔いはなかった。

月曜日、八時半に出勤すると、事務所には当直管理人が机に座って、管理日誌を書いていた。しばらくすると井上が事務所に入ってきた。

「一昨日は、お休みのところへ電話をしまして、すみませんでした」

龍二が座っている机の前に来て、頭を下げた。

「連絡を入れてくれてありがとう。君こそ休日を出勤して、対応にあたってくれて、すまなかったね」

龍二は、ねぎらいの言葉をかけた。井上が出勤して処理をしてくれたからこそ、ナナミと逢うことができたのだ。内心助かったと思っていた。やっと取れたナナミの予約を、あの時点でキャンセルすることは耐えられない。キャンセル料金よりも、気持ちの整理ができずに落ち込むところだった。

施設では高齢者を預かっている関係で、事故があれば管理職が出勤して、少しでも早く家族との調整を行い、大事にならないように努めていた。

事故は、いつ起こるかわからない。いつも龍二が出て行くわけにはいかない。そのために役割分担を決めていた。現場部門は介護課長が、管理部門は総務課長に、対応の責任を持たせていた。連絡を受け指示は出すが、家族や職員への対応は極力課長たちに任せるようにしていた。

「その後の経過は、どうなっている」

椅子の背もたれに体重を預けてから、ゆっくり井上に聞いた。

「宮本さんの家族には、丁寧に謝っておきました。病院の支払いや本人の通院送迎を、施設が責任を持って行うと言ったら、納得してくれました。それと依藤美佳ですが、プリセプターの金井圭子に気落ちしている依藤の気持ちを、フォローするよう言っておきました」

井上は直立不動で報告をしていた。

「それは良かった。家族も宮本さんを預かってもらえること自体を、感謝しますと家族会で言われていたから、余分な手間が、かからないと言ったから、了解してくれただろう」

「依藤美佳も落ち着いて仕事をしています」

「新人の介護職員には、ベテランの介護職員をプリセプターとして付け、仕事の指導や、業務に対する不安な気持ちを取り除いてやってほしい。介護職員の配置定数を確保するためにも、新人の離職率を少なくしなければならぬ」

「まったく同感です」

井上は龍二の言葉に、何回もうなずいた。龍二は視線で、ロビーの相談室に場所を移ろう、と合図を送った。当直管理者が事務所に居ては、突っ込んだ話が出来ない。どこから話の内容が漏れるかわからない。

二人はロビーの相談室に場所を替えた。

「宮本さんが乗っていた車椅子のブレーキが外されていた件だが、どう思う」

龍二は井上に問いかけた。

「一昨日、事務長との電話で指摘を受けてから、いろいろ調べました。村津も出勤日でその場に居たので、やった可能性はありますが、だれもブレーキを外すところは見ていません」

「村津は、数日前に宮本さんに叩かれたと、家族の前で言われているから、その仕返しをしたのかもわからない」

「そうかも知れませんか」

「確証がないかぎり、余分なことは言わないことだ」

「デイルームや廊下に、カメラを付けてはどうでしょう。入所者に事故でも起きれば、だれが関わったかビデオを再生すれば、見るこ  
とが出来ます」

「カメラを設置すれば、職員を見張っていることになる。職場の雰囲気が悪くなって、辞める者も出てくるかも知れない」

「そうですね。仕事への情熱が薄れても困りますね」

「しばらくは、このままでいこう。村津については、今日返事をも  
らうことになっている。返事内容を聞いてからのことだ」

「そうしましょうか」

井上は、そう言っとうなずいていた。

「村津には十時に三階の会議室へ、来るように言ってくれないか。道中課長にも同席してもらうことにする。井上課長には、村津が会議室に来ている間、介護現場の穴埋めを手伝ってやってくれないか」

「わかりました」

井上は、そう言っで相談室を出て行った。龍二は施設長への報告を考えていた。宮本弘枝の骨折の件、それと村津の面談結果も報告しなければならぬ。施設長のねっちりとした言い回し方で、責められるのかと思うと気が重かった。

龍二は十時前に道中と、三階会議室に入った。すぐに村津も入ってきた。

「おはよう。忙しい時間に、呼んですまなかったね」

龍二は、村津に柔らかい表情で声をかけた。

「大丈夫です。井上課長が私の代わりを、やってくれてますから」  
そう言って村津は、龍二と道中との会議机を挟み、向かいに座った。

「早速だが、木曜日に話をした件の返事を聞かせてもらおうと思って、君を呼んだんだ」

「わかっています。嫁さんと何回も話をしました。異動すると給料が下がるんですよ。ローンも残っているし……嫁さんが生活が出来なくなると泣いていました……他の施設に転職したとしても、以上の給料をもらえるかどうか……」

「どうなんだ。なにも泣き言を聞くために呼んだんではないよ」

龍二は、村津の言葉が返事になっていないことに苛ついた。

「僕をそのまま置いておいて、新人の職員を異動させてはどうですか。その方が戦力ダウンにならないと思います……」

「君の意見を聞いているのではない。デイスアービス部署への異動について、承諾するのかどうかを聞いているんだ」

「承諾しなければ、どうなるんですか……クビですか」  
のらりくらりと応える村津に対して、龍二の口調は強くなっていた。

「前にも言ったように、異動については職務命令で、選択の余地はないんだ。異動の内示の貼り紙をみたら、君が驚くだろうから事前に言っているんだ」

「……」

「異動については、選択の余地はない。通告なんだ。拒否しても、来月から介護課には君の名前は消えて働く場所はない」

村津は敵意に満ちた表情で睨んできた。龍二は殺気を感じたが睨み返した。

「異動に同意しなければ、クビですね」

「辞めるかどうかは、君が決めることだ。デイスアービス部署で働く場所を用意している」

「……」

村津は何も応えない。

「以上だ。職場に戻って職務に復帰してくれないか」

村津は、反論を諦めたのか、肩を落とさうつむき加減で、会議室を出て行った。龍二は何か胸につかえるものを感じ、気持ちがすつきりしなかった。

「やっぱり、村津には虐待行為の疑いがあるため、異動をしたんだとはつきり言ってやった方が、納得したんではないですか」

横から龍二の気持ちを察して、道中が声をかけてきた。

「それを言ったら、村津はやってないと拒否して、話が大きくなってしまう。確かな証拠がないんだから。あくまでも総合的判断で、異動を行うことで押し通すんだ」

龍二は語句を強めて言い返した。

「わかりました。いろんな噂が飛び交うと思いますが、人事異動は総合的判断ということで、押し通しましょう」

そう言って、道中はうなずいていた。

「今から施設長室に行ってくる。報告は早い方がいいだろう」

龍二は会議室を出て、施設長室に向かった。

いつものことだが、施設長室の前に立ち、ドアをノックする直前が緊張する。今から説明する内容を順序よく、効率的に話さなければと考えると、重圧感が忍び寄ってくる。

ドアをノックすると、中から声が出てドアを開けた。

施設長はソファアに座って本を読んでいた。

「今、よろしいでしょうか。報告ごとがありました」

施設長の前に立つと、事務長としての真価を試されているような緊張感が走る。

「どうぞ、座ってください」

施設長は、視線で向かいのソファアを指した。本の読んでいたページの端を折って閉じ、テーブルの上に置いた。その本の題目を見ると、アダム・スミスの『国富論』だった。

「この土曜日に入所者の宮本さんが、スロープのところで、車椅子

に乗ったまま壁に当たり、右腕を骨折しました。すぐに病院でレントゲンを撮り治療を受け、大事には至っておりません。家族には井上課長から連絡して、謝り了承を得ております」

「だれも側にいなかったのかね」

「いたのですが、目を離れた隙に車椅子が走り出してしまったとのことです」

「ブレーキを掛けていなかったのか」

「新人職員の依藤美佳が対応していたのですが、掛け忘れたよう  
で」

だれかがブレーキを外した疑いについては話さなかった。言えば施設長との対話が長くなり、職員教育が出来ていないと叱責されかねない。

「普段から新人職員に、どんな指導しているんだ。車椅子を停めたときは、ブレーキを掛けておくのは、基本中の基本だろうが」

施設長の声が、少し荒くなってきた。

「言われるとおりです。依藤美佳は当然ですが、プリセプターである金井圭子にも、きつく注意をしておきました」

龍二は結果を見て言うのであれば、何とでも言えると、苦虫を噛んだ気持ちで、施設長の言葉を聞いていた。

「もう一件報告ですが、来月の一日付けで村津君のデイサービス部署への人事異動を発令したいと思っております」

「なぜこの時期に人事異動なんだ」

「この前にも報告しましたように、村津君には竹中さんの件があるのと、もう一件、宮本さんが面会に来た家族の前で、『村津に叩かれた』と言っているのを、相談員が聞いています。家族は、『そんなことないやろ』と取り合わなかったようですが、施設に対する不信心を持っていてと思います。宮本さんは認知症がありますので、言葉の信憑性はわかりません。施設長がいつも言われている『転ばぬ先の杖』という、ことわざにあるように、疑いがある以上は念には念を入れて用心すべきです。ここは人事異動という形で対応した

いと考えています。宮本さんの家族も、施設側の対応を見て安堵をされるのではないですか。異動について、村津君には伝えておりません」

龍二は施設長の目を見て、思っていることを一気に喋った。鼓動が少し速くなっていた。ここで引き下がれない。対応の処理を間違えば、その責任は事務長にかかってくるのだ。

「人事異動での対応は、事務長が考えたのか」

「そうです。これが最善の方法だと思っています」

施設長は少し間を置いて口を開いた。

「事務長は、アダム・スミスの国富論を読んだことがあるかね」

龍二は、突然の場違いの言葉に戸惑った。テーブルの上に置かれている本に視線をやった。アダム・スミスについては、イギリスの哲学者であり、経済学者であることぐらいしか知らない。

「読んだことはありません」

施設長は、テーブルの上にある本を手に取り話し始めた。

「国富論には、どうやったら皆が豊かな暮らしをすることができるのか、といったことが書かれている。経済は、政府が口を出さずに自由にさせて置いた方がいいという考えだ。つまり自由競争をさせることにより、経済は効率化していき結果としてうまくいく。政府はできる限り、経済活動に口を挟まぬ方がいいというのがアダム・スミスの考えだ。私が言っている意味がわかるかね」

「はあ……言われていることは……人事異動をするなという意味でしょうか」

難しい哲学者の話を出さなくても、もっと要点だけを言えばいいのにと龍二は思ったが、そんなことは口に出せない。

「私が言いたいのは、事務長が現場に対して口を挟みすぎではないのか。現場の声をもっと吸い上げてから、物事を決めても遅くないのではないか、ということを行っているんだよ」

施設長の語気が強められていた。

龍二は迷った。施設長の言葉の中から、人事異動の取り止めの意

味が、含まれているのを感じた。施設長は、はっきり指示を出さない。事故が起こったときの実質責任を回避するためだ。事件や事故が起これば、その責任のすべては、処理を含め事務長が負わなければならぬ。ここは施設長の理想論に、付き合っているわけにはいかないのだ。

「異動については井上課長や道中課長と、協議の上決めたものです。事故が起こってからでは遅いのです。村津君の異動を認めてください」

もう後へは戻れない。事務長の立場が薄れてしまう。

「昨日の日曜日、自宅に村津君から電話があつて、『事務長から来月異動だと言われた。異動先のデイサービス部署は夜勤がないので、夜勤手当が減って給料が下がり、住宅ローンの返済が出来なくなるから、何とかしてほしい』との内容だった。事務長は、異動で村津君の生活が苦しくなることを知っていたのか」

「知っていました。家庭事情を考慮していたら人事異動は出来ません」

きっぱり言い切った。施設長の前で、こんな言い方をしたのは、初めてだった。

「事務長は、先ほど私が言ったアダム・スミスの国富論の意味が、何もわかっていない。『どうやったら皆が豊かな暮らしをすることができるのか』を問うているんだ。ここでいう皆とは職員のことだ。職員を路頭に迷わして、何が人事異動だ。職員が働きやすい幸せを感じる人事異動ならやりなさい」

理想論の連発だ。このままだと万事休すだ。事務長としての値打ちもあつたものではない。しかし、無礼がないように、説明しなければならぬ。施設長の機嫌を損ねれば、事務長の首が飛んでしまう。龍二は心の中で、冷静にと自分自身に言い聞かせた。

「お言葉を返すようで申し訳ありませんが、言わせていただきます。竹中さんの内出血の件と、宮本さんが叩かれたと言った件は村津君が関係していました。それと宮本さんの乗った車椅子が、走り

出して骨折した件ですが、どうも故意にブレーキが外された可能性があります。近くに村津君が居たんです。叩かれたと家族に言った腹いせに、やったのではないかと推測しています。ただ証拠はありませんが……」

「ブレーキの件は、新人職員が掛け忘れたと言ったではないか」

「村津君が外した確証はありません。あくまでも推測です。しかし何か手を打たないと、このままでは施設内の秩序は守れません。人事異動は、事故防止と職員たちの動揺を抑えるために選んだ結論です」

力強く言ったせいか、顔面が熱くなった。

「村津君が可哀想な気もするが……」

施設長は判断をしかねている様子だった。

「施設を守るためです。事故があつてからでは取り返しがつきません。それに村津君には、異動の話をしてしまっているんです。お願いします。異動を認めてください」

龍二は座ったままであつたが、施設長に向かって頭を下げた。ここは腹を括るしかあるまい。今回の異動を拒否されれば、事務長としての権威はがた落ちで、施設長の操り人形であると、職員間で陰口をたたかれるのは目に見えている。惨めな思いをするくらいなら、職場を辞める結論を出すしかあるまいと思つた。

「わかつた。事務長がそこまで言い切るのなら、君の顔を立てて、今回の人事異動を認めることにしよう。それでいいね」

施設長の顔から、先ほどの強ばつた表情は消えていた。

龍二は、ほつとした反面、施設長が事務長に恩を売ることによつて、忠実な部下として、働かそうと思つていることはわかつていた。雇われの身としては、致し方がないことだ。

「ありがとうございます」

龍二は素直に、施設長に対して頭を下げた。今回の人事異動を施設長に認めさせたことで、事務長の権威が少しだけだが、上がったように思えた。

「これからも、よろしく頼むよ」  
施設長は、笑いを含んだ目で言った。

木曜日の朝から、道中課長がロビーの掲示板に、人事異動の内示を貼りだしていた。足を止めて見る職員もいれば、職員同士で何やらひそひそ話をしている者もいる。そんな光景を、龍二と道中は事務所から見ている。

「来月の一日に、施設長室で辞令を渡してもらうことにする」

龍二は道中に言った。

「村津は、当日出勤してくるでしょうか」

道中は、心配そうな表情で聞いてくる。

「そんなことは、本人に聞いてみないとわからないよ。そのときの対応は当日考えるさ」

「そうしますか」

そう言って、二人はお互いの自席に戻って仕事を始めた。

龍二はどことなしか落ち着かなかった。何回も事務所の掛け時計に視線を送った。

「やっと十一時五十分になったか」

龍二はつぶやくと、ゆっくり立ち上がり事務所を出て、施設横の職員駐車場へ向かう。車の運転席に乗り込むと携帯をポケットから取り出し、正午になるのを待つ。

携帯のデジタル時計が、十二時になると同時に、発信キーを押す。呼出音が鳴り、男性の声がした。

「ココナツクラブです」

一回目で携帯が繋がったことに、龍二は安堵の表情を浮かべた。

「今週の土曜日、ナナミさんの予約が取れる時間帯はありますか」